

古サルデーニャ語における強変化タイプの完了形*

金澤 雄介

1 導入

古サルデーニャ語ではラテン語の形式に由来する完了形が用いられていた。しかし 16 世紀頃から徐々にこのような完了形は失われ、現代サルデーニャ語では一部の方言¹を除き「HABÈRE「持つ」の直説法現在に由来する形式＋過去分詞」という分析的構造にとって代わられた (Wagner 1938-1939: 13-14, Blasco Ferrer 1984: 276)。

本稿では、古サルデーニャ語文献に実際に現れる形式に基づいて、強変化タイプの完了形の通時的変化について考察する。古サルデーニャ語には、ラテン語の完了形の形成法を受け継いでいる動詞に加えて、完了形の形成法に移行が見られる動詞が存在する。本稿では、完了形の形成法の移行パターンを分類した上で、それぞれの移行が生じた要因及びその背景について考察を加える。

2 考察に向けての準備

本章では、本稿での考察に必要な前提知識について述べる。

2. 1 ラテン語の完了形の形成法と動詞活用タイプ

本稿では形態論的な観点から、ラテン語の完了形を 2 種類に分類する。

* 本研究は、平成 20 年度笹川科学研究助成（研究題目：「サルデーニャ語における動詞形態論の歴史的研究」）の援助を受けている。

略号一覧：ant. = 古 (antico), camp. = カンピダーノ方言 (campidanese), inf. = 不定詞 (infinito), it. = イタリア語 (italiano), lat. = ラテン語 (latino), log. = ログドーロ方言 (logudorese), mod. = 現代 (moderno), pl. = 複数 (plurale), protorom. = ロマンズ祖語 (protoromanzo), sard. = サルデーニャ語 (sardo), sg. = 単数 (singolare), 1, 2, 3 = 人称。

¹ Wagner (1938-1939: 14) によると、サルデーニャ島南西部のスルチス (Sulcis) 地方で話されるカンピダーノ方言の変種では、ラテン語に由来する完了形が用いられているという。また、島北部にあるバロニア (Baronia) 地方、プラナルジャ (Planargia) 地方で話されるログドーロ方言の変種でも同様に完了形が保存されているという。現代サルデーニャ語に部分的に保存されている完了形については稿を改めて論じたい (→註 27)。

1 つは全ての人称において語尾にアクセントを持つ弱変化タイプである。もう 1 つはいくつかの人称において語根にアクセントを持つ強変化タイプである²。強変化タイプの完了形の形成法はさらに 4 種類に下位分類できる。語尾の前に *s* を持つタイプ、語尾の前に *u* を持つタイプ、母音交替を見せるタイプ、そして語根の重複を見せるタイプである。本稿では強変化タイプの完了形の形成法をそれぞれ *s* 完了、*u* 完了、母音交替完了、重複完了と呼ぶ。以下に強変化タイプの完了形のパラダイムを例示する。

	< <i>s</i> 完了 >	< <i>u</i> 完了 >
inf.	ADDŪCĚRE 「持つて行く」	TENĚRE 「持つ」
1sg.	ADDŪXĪ (<i>x</i> = /ks/)	TENUĪ
2sg.	ADDŪXISTĪ	TENUISTĪ
3sg.	ADDŪXIT	TENUIT
1pl.	ADDŪXIMUS	TENUIMUS
2pl.	ADDŪXISTIS	TENUISTIS
3pl.	ADDŪXERUNT ³	TENUERUNT
	< 母音交替完了 >	< 重複完了 >
inf.	FACĚRE 「作る」	DARE 「与える」
1sg.	FĚCĪ	DEDĪ
2sg.	FĚCISTĪ	DEDISTĪ
3sg.	FĚCIT	DEDIT
1pl.	FĚCIMUS	DEDIMUS
2pl.	FĚCISTIS	DEDISTIS
3pl.	FĚCERUNT	DEDERUNT

上に示したパラダイムから、ADDŪCĚRE の完了形には *s* が、TENĚRE の完了形には *u* が含まれていることがわかる。一方、FACĚRE では例えば直説法現在 1 人称単数 FACIŌ と、対応する完了形 FĚCĪ との間には *a* ~ *ē*

² 古典期のアクセント規則に従うと、*u* 完了の 1 人称単数では *u* にアクセントがあった (*tenúimus*)。しかしながら 3.1.2 で触れるように、ロマンス諸語への移行の過程において *u* は半母音化した。その結果アクセントは後続する *i* に移ったと考えられる。

³ ラテン語では 3 人称複数語尾に *-ĒRUNT* と *-ĚRUNT* のヴァリエントが存在した。ロマンス諸語では短母音を持つ語尾が受け継がれているので、本稿では長母音記号を付さない *-ERUNT* で統一する (cfr. Meyer-Lübke 1923: 332)。

の母音交替が見られる。DARE の完了語幹は語根 *da* の重複によって作られた *ded* である⁴。

ラテン語には 4 種類の動詞活用タイプが存在した。それらは不定詞の語尾 *-āre*, *-ēre*, *-ĕre*, *-īre* によってそれぞれ特徴付けられる。若干の例外はあるものの、第 I 変化動詞 (*-āre*) と第 IV 変化動詞 (*-īre*) の完了形は弱変化タイプであり⁵、第 II 変化動詞 (*-ēre*) と第 III 変化動詞 (*-ĕre*) の完了形は強変化タイプであるという一般的傾向がある (cfr. Ernout 1953: 187-188)。

2. 2 古サルデーニャ語文献概説

Blasco Ferrer (1984: 64) は, *Giudicato* (→註 6) がサルデーニャ島を統治していた 11 世紀から 14 世紀頃のサルデーニャ語を古サルデーニャ語と定義している。本稿でもこの定義に従い, 11 世紀から 14 世紀にかけて書かれた古サルデーニャ語文献に現れる完了形を考察の対象とする。本節では, 本稿で扱う古サルデーニャ語文献について概説する。

Condaghe di San Pietro di Silki (CSP)

Condaghe di San Pietro di Silki とは, サルデーニャ島北西部, サッサリ (Sassari) 郊外にある San Pietro di Silki 修道院において作成された *condaghe*⁶ を指し, 1073 年から 12 世紀後半にかけて記録されたと推定されている。Giudicato (トッレス国) からの寄進者としては Mariano 1 世 (在位 1073?-1082), Gonnario (在位 1127-1134), Barisone 2 世 (在位

⁴ *s* 完了には, 母音交替や語根末子音の形態音韻論的交替が見られる動詞もある。例えば *REMANĒRE* 「留まる」の完了形 1sg. *REMĀNSĪ* では母音交替 (*a* ~ *ā*) が観察される。また *SCRĪBĒRE* 「書く」の完了形 1sg. *SCRĪPSĪ* では *s* が後続することで語根末子音が無声化する。

⁵ 第 I 変化動詞の完了形の例: inf. *AMĀRE* 「愛する」, 1sg. *AMĀVĪ*, 2sg. *AMĀ(VI)STĪ*, 3sg. *AMĀVIT*, 1pl. *AMĀVIMUS*, 2pl. *AMĀ(VI)STIS*, 3pl. *AMĀ(VE)RUNT*。

第 IV 変化動詞の完了形の例: inf. *DORMĪRE* 「眠る」, 1sg. *DORMĪVĪ*, 2sg. *DORMĪ(VI)STĪ*, 3sg. *DORMĪVIT*, 1pl. *DORMĪVIMUS*, 2pl. *DORMĪ(VI)STIS*, 3pl. *DORMĪ(VE)RUNT*。

上記のパラダイムのうち, () で示した音節はラテン語の段階で消失し始めていた (cfr. Ernout *op.cit.* 211)。3 人称複数語尾に含まれる母音 *e* の長短については註 3 を参照。

⁶ 古サルデーニャ語文献の中で最もよく知られているのがコンダーゲ (*condaghe*) と呼ばれる文書である。*condaghe* とは, ギリシャ語 *κολλάκιον* 「羊皮紙を巻きつける棒切れ」に由来し, 修道院 (ベネディクト会修道院) で作成された公文書を指す。*condaghe* には訴訟, 土地売買の契約, 領土の分配及び画定, 財産及び遺産の譲渡, 物々交換等に関する記録がなされた。またその中には, *Giudicato* (中世サルデーニャにあった王国: トッレス (Torres), ガッルーラ (Gallura), アルボレア (Arborea), カリアリ (Cagliari) の 4 つが存在した) からの寄進に関する記録も多く見られる。

1134-1191) の名前が確認される。CSP は計 443 節という、condaghe の中で最も大部からなる。ゆえに極めて多くの資料を提供し、当時の言語状態はもとより、生活、社会構造などを知る上でもその価値は高い。また、CSP は古ログドーロ方言で書かれた文献の中でもとりわけその特徴をよく保存しているという点で貴重な史料として位置付けられる (cfr. Blasco Ferrer 2003: 151)。現在はサッサリ大学図書館に所蔵されている。本稿では Delogu (1997) による校訂テキストを用いる。

Condaghe di San Nicola di Trullas (CSNT)

Condaghe di San Nicola di Trullas は、島北部に位置するログドーロ地方の西部、ポッツォマッジョーレ (Pozzomaggiore) 近郊にある San Nicola di Trullas 修道院における condaghe で、1113 年から 13 世紀後半にかけて作成されたと考えられている。この時代の Giudicato (トッレス国) の王は Gosantine 1 世 (在位 1114-1124)、Mariane de Athen-Lacon (在位 1124-1127/30)、Gonnario (在位 1127/30-1134) 及び Barisone 2 世 (在位 1134-1191) で、テキスト中にも修道院への寄進者としてしばしば現れる。テキストは 24 人の写字生によって書かれ、計 332 節からなる (cfr. Blasco Ferrer 2003: 155)。現在はカリアリ大学図書館に所蔵されている。本稿では Merci (2001) の校訂テキストを参照する。

Carte Volgari (CV)

Carte Volgari とは、カリアリ国の歴代の王 (Torchitorio I 世 (在位 1058-1089)、Cosantino-Salusio (在位 1130-1162)、Benedetta di Lacon (在位 1214-1232) など) からカリアリ大司教 (Arcivescovado di Cagliari)、あるいはカリアリ北部に存在したスエッリ司教 (Vescovado di Suelli) に対する財産、土地などの寄進、記録した文書の総称であり、内容としては上述の 2 つの condaghe と際だった違いはない。1070 年から 1226 年にかけての文書が残存しており、計 21 編からなる。現在はカリアリ大司教資料館 (Archivio Arcivescovile di Cagliari) に保管されている (Solmi 1905)。本稿では Solmi (*op.cit.*) の校訂テキストを使用する。

現代サルデーニャ語には大別して 2 つの方言がある。島北部及び中央部で話されるログドーロ方言と、島南部で話されるカンピダーノ方言である。古サルデーニャ語では既に 2 つの方言の分岐が生じており、CSP 及び CSNT にはログドーロ方言の、CV にはカンピダーノ方言の特徴が見られる。しかしながら強変化タイプの完了形に関しては、両方言の間に顕

著な差は見られない。従って本稿では基本的にそれぞれのテキストに現れる完了形を区別せずに扱う⁷。

2. 3 先行研究

古サルデーニャ語の完了形に関する研究として、Meyer-Lübke (1902), Wagner (1938-1939), Dardel (1958), Blasco Ferrer (1984) などがある。しかしながら、先行研究では古サルデーニャ語文献に現れる完了形が網羅的に扱われておらず、また各々の完了形の通時的変化及び形成法の移行についても詳細な分析がなされていない。従って本稿では先行研究の概観は行わず、関連する箇所を次章以降で逐一参照する⁸。

3 考察

本章では、まずラテン語の完了形の形成法を受け継いでいる動詞について見る。続いて完了形の形成法に移行が見られる動詞について、その移行パターンを分類した上で、それぞれの移行が生じた要因及びその背景について考察する⁹。

3. 1 ラテン語の完了形の形成法を受け継いでいる動詞

3. 1. 1 s 完了

inf. MITTĒRE 「送る」

1sg. MĪSĪ > misi (CSP: 364)¹⁰

3pl. MĪSERUNT > miserun (CSP: 356)

inf. INDULGĒRE 「許す」

3sg. INDULSIT > indulsit (CSP: 194, 245, 246, 270, 338ii. CSNT: 27, 47, 135, 140, 183, 188, 235, 238, 240, 283)

3pl. INDULSERUNT > indulserun (CSP: 33, 48, 248. CSNT: 74, 81)

⁷ 詳細については省略するが、弱変化タイプの完了形の語尾には両方言間に明確な差異が観察される。

⁸ HABĒRE 「持つ」と ESSE 「～である」の完了形は他のロマンス諸語と同様、サルデーニャ語においても独自の変化をこうむった。この 2 つの助動詞の完了形については稿を改めて論じたい。

⁹ 以下、それぞれの形式の後の () 内に示した数字はその形式が現れる節番号を表す。ローマ数字は同一節内に現れる回数を示す。また、古サルデーニャ語に対応するラテン語の形式については、Atzori (1953) 及び Wagner (1960-1964) = DES を参照した。

¹⁰ s が二重に表記されている形式も確認された：missi (CSP: 399)。書き手の誤りによるものと推測できる。

以下に示すように、語幹末に *k* を持つ動詞の場合、逆行同化によって重子音 *ss* が生じる (*ks* > *ss*)。しかしながら古サルデーニャ語文献では、重子音はしばしば単子音で表記されることがあったので、本来重子音 *ss* であるものが単子音 *s* で表記されている例がある¹¹。

inf. ADDŪCĒRE 「持って行く」

1sg. ADDŪXĪ > battussi¹² (CSP: 79, 85, 95, 101, 103, 104, 105, 106, 200, 203 ecc.), uattussi (CSP: 82, 99, 102, 107, 108, 162, 273), vattussi (CSP: 194), batussi (CSP: 310, 375. CSNT: 46, 102, 305), batusi (CV: 12, 13)

2sg. ADDŪXISTĪ > batusisti (CSNT: 140)

3sg. ADDŪXIT > uattussit (CSP: 154, 359), battussit (CSNT: 179), batusit (CSNT: 330, 331)

1pl. ADDŪXIMUS > battusimus¹³ (CSP: 373), batusimus (CSP: 394. CSNT: 182)

3pl. ADDŪXERUNT > battusserun (CSP: 205, 307), uatusserun (CSP: 205), batusserun (CSP: 394), batuserun (CSNT: 140)

1sg. batti (CSP: 73, 319iii) という形式も確認された。battussi に含まれる *-uss-* が消失した形式であると考えられる¹⁴。

inf. DŪCĒRE 「持って行く」

1sg. DŪXĪ > iussi¹⁵ (CSP: 109)

¹¹ cfr. lat. GUTTUR > guturu (CSNT: 86, 87. CV: 11iii, 20) 「小川」, lat. VACCAM > baca (CSNT: 168) 「雌牛」。このような表記法が音韻的な変化を反映しているものではないことは、現代サルデーニャ語でラテン語の重子音が保存されているという事実からも裏付けられる: log.mod./camp.mod. gútturu, bákka.

¹² サルデーニャ語では母音で始まる語に *b* が付加されることがある (e.g. lat. EXĪRE > log.mod. bessíre, camp.mod. bessíri 「出る」)。また, *dd* > *tt* に見られるように, 有声閉鎖重子音は無声化する (e.g. lat. HABŪĪ > *abbi > appi (CSP: 40, 80, 81) 「持つ (完了 1sg.)」)。

¹³ *bactusimus* (CSNT: 80) という形式も確認された。 *kt* > *tt* に対するハイパーコレクションによるものと考えられる (cfr. lat. OCTŌ > log.mod. òtto, camp.mod. óttu 「8」)。

¹⁴ *u* 完了に属する *petti*, *potti* (→3. 1. 2) などに含まれる重子音 *tt* の影響によって, *battussi* に含まれる *tt* が完了形を標示するマーカーと再解釈された結果, 余剰となった *ss* が消失したと推定できるかもしれない。

¹⁵ 語頭の *iu* はラテン語の *du* から音変化によって導くことはできない。DES (I: 481) では *iugu* (CSP: 436. CSNT: 9, 176, 210) (< lat. JUGUM) 「くびき」の影響によるものとされている。その根拠として, 「持って行く」ための手段としてしばしば「くびき」が用いられたことを挙げている。

3pl. DŪXERUNT > iusserun (CSP: 65, 205. CSNT: 179, 330)

inf. BENEDĪCĒRE 「祝福する」

1sg. BENEDĪXĪ > benedissi (CSP: 40)

3sg. BENEDĪXIT > benedissit (CSP: 359. CSNT: 150)

1pl. BENEDĪXIMUS > biniissirus (CV: 14, 17)

inf. FĪGĒRE 「固定する」

3sg. FĪXIT > fissit (CV: 11)

サルデーニャ語ではラテン語の子音連続 *ns* は *s* になる : lat. *ABSCŌNSĒ* > *ascuse* (CSP: 146) 「内密に」, lat. *TENSIŌNIS* > *tesonis* (CV: 11, 20, 21) 「広がり」 (Wagner 1984: 296). 従って以下に示す *REMANĒRE* の完了形でも 1 つの例外を除いて *n* の消失が観察される.

inf. *REMANĒRE* 「留まる」

3sg. *REMĀNSIT* > *romasit* (CSP: 16), *ramasit* (CSP: 23), *remasit* (CSP: 35, 39, 104, 119, 150, 279ii, 300, 303, 314, 322 ecc. CSNT: 5)

3pl. *REMĀNSERUNT* > *remaserun* (CSP: 38), *remanserun* (CSNT: 163)

また, サルデーニャ語ではラテン語の子音連続 *nks* は *ns* になる. 従って以下に示す *ADJUNGĒRE* の完了形では語幹末の *k* の消失が見られる.

inf. *ADJUNGĒRE* 「加える」

1sg. *ADJŪNXĪ* > *aiunsi* (CSP: 146)

3sg. *ADJŪNXIT* > *aiunsit* (CSP: 335)

1pl. *ADJŪNXIMUS* > *aiunsimus* (CSP: 223)

3. 1. 2 u 完了

以下に示す 2 つの動詞 **POTĒRE* と *TENĒRE* の完了形では, *u* が消失し, 語幹末子音 *t* と *n* が重子音になっている. **POTĒRE* のいくつかの完了形で単子音 *t* が現れているが, 前節及び註 11 で述べたように実際は重子音であったと推定できる.

inf. **POTĒRE* 「～できる」

1sg. *POTUĪ* > *potti* (CSP: 100, 183, 205)

3sg. POTUIT > pottit (CSP: 68), potit (CSP: 98)

3pl. POTUERUNT > potterun (CSP: 31, 34ii, 42, 46, 207), poterun (CSNT: 140, 332)

inf. TENĒRE 「持つ」

1sg. TENUĪ > tenni (CSP: 27, 28, 30, 31ii, 33iv, 34, 42, 44ii, 48ii, 57 ecc.)

3sg. TENUIT > tennit (CSP: 31, 99, 102, 106, 108, 303. CSNT: 140)

1pl. TENUIMUS > tennimus (CSP: 82)

3pl. TENUERUNT > tennerun (CSP: 105)

サルデーニャ語では *u* がいくつもの種類の子音に後続する場合、順行同化によって重子音が生じる (Wagner 1984: 232) : lat. JĀNUAM > log.mod. *ǰanna*, camp.mod. *dʒenna* 「門」, lat. FUTUĒRE > log.mod. *futtire*, camp.mod. *futtiri* 「姦淫する」, lat. HABUĪ > **abbi* > *appi* (CSP: 40, 80, 81) 「持つ (完了 1sg.)」. 以下では、これらの重子音が生じた要因について考察を加える.

例えば、上に示した POTUIT 及び TENUIT に含まれる *u* は 1 つの母音であった。つまりラテン語の段階では *u* とそれに後続する *it* はそれぞれ別の音節に属しており、*u* と *i* は母音連続を形成していた。しかしロマンス諸語への移行の過程において、*u* は半母音化し、後続の音節 *it* に組み込まれた。この過程は以下のように示される (*\$* は音節境界を示す)。

lat. PO\$TU\$IT > protorom. **pot\$uit*

lat. TE\$NU\$IT > protorom. **ten\$uit*

上に示した変化から、*u* の半母音化によって 3 音節であったものが 2 音節になり、音節境界は **t* と **u̥* 及び **n* と **u̥* の間にあることがわかる。

ここで、Murray / Vennemann (1983: 520) が提案した Syllable Contact Law の概念を導入する。Syllable Contact Law を簡略化して述べると、「音節の連続 A\$B において、B の頭子音の共鳴度は、A の末子音の共鳴度より低い、少なくとも同等であるような音節構造が好まれる」となる。

さて、ロマンス祖語に仮定される **pot\$uit* と **ten\$uit* の音節構造に立ち戻ってみると、第 2 音節の頭子音 **u̥* は第 1 音節の末子音 **t* と **n* よりも共鳴度が高く、Syllable Contact Law の観点から見れば整合性の低い構造を持つといえる。従って **t_{u̥}* 及び **n_{u̥}* はそれぞれ順行同化によって *tt*, *nn* になり、音節境界に位置する 2 つの子音の共鳴度を等しくする

ことによって、Syllable Contact Law の規則に従った音節構造に変化したと考えられる (i.e. *pot\$ụit > pot\$tit, *ten\$ụit > ten\$nit)¹⁶.

以下に示す 2 つの動詞, *VOLĒRE と PĀRĒRE の完了形では, 上述の動詞の完了形とは異なり, 表記上は <u> が保存されている.

inf. *VOLĒRE 「欲する」

3sg. VOLUIT > uoluit (CSP: 45, 98), voluit (CSNT: 276)¹⁷

3pl. VOLUERUNT > uoluerun (CSP: 341), boluerun (CSP: 31)

inf. PĀRĒRE 「～に見える」

3sg. PĀRUIT > paruit (CSP: 43, 245, 388, 290. CSNT: 172, 182, 188, 194, 305, 330ii)

3pl. PĀRUERUNT > paruerun (CSP: 205, 365)

上に示したラテン語の形式に含まれる u は, 古サルデーニャ語でも <u> で表記されているが, 半母音 *ụ を経て両唇音 /b/ に子音化していたと推定できる. その根拠として, 古サルデーニャ語文献では /b/ を表すために <u> を用いている例が多数観察されることが挙げられる: lat. LABŌREM > labore (CSP: 346. CSNT: 1, 2, 11 ecc.) ~ lauore (CSP: 44, 141, 196 ecc.) 「収穫された果実」, lat. CABALLUM > caballu (CSNT: 10, 47, 56 ecc. CV: 2ii) ~ cauallu (CSP: 87, 114, 117 ecc. CV: 10, 21) 「馬」, lat. BOVEM > boe (CSP: 87, 155, 180 ecc. CSNT: 20, 57, 75 ecc.) ~ uoe (CSP: 122, 123, 135 ecc.) 「牡牛」. この他にも, 3. 2. 5 で触れる kerbit と keruit の間に見られる と <u> の揺れも, このような推定を裏付けるといえる. 以上のような見方から上に示した完了形は保守的な表記を保持しているが, 実際には /bolbit/, /parbit/ のように /b/ を含んでいたと推定できる.

*ụ が b に子音化するという変化も, 上述の Syllable Contact Law の概念を考慮に入れることで, 自然な説明を与えることができる. すなわち,

¹⁶ *po\$ụit, *te\$ụit という音節構造を想定するのであれば, Syllable Contact Law に対する不整合性は生じない. しかしながらこのような音節構造を想定しない理由として, 文学期のラテン語には語頭において “子音 + ụ” という連続は kụ を除いて存在しないことが挙げられる. 一方語頭における “ụ + 母音” という連続は観察される (cfr. Maiden 1995: 69).

¹⁷ l の後で u が消失する形式も観察される: 1sg. VOLUI > voli (CSNT: 150), 3sg. VOLUIT > uolit (CSP: 120). この動詞は語頭に唇音を持つので, 異化によって u が消失した可能性がある. また, it. volli のように *lụ が順行同化によって ll になったが, 表記上は単子音 <l> が用いられている可能性も否定できない.

第 2 音節の頭子音 *u の共鳴度は第 1 音節の末子音 l 及び r の共鳴度より高いので、Syllable Contact Law の観点からすると整合性が低い構造であるといえる。*u が l と r よりも共鳴度の低い b に変化することで、Syllable Contact Law の規則に従った音節構造を得たと考えられる。この過程を *voluit* と *paruit* を例に示すと、以下のようになる。

lat. VO\$LU\$IT > protorom. *vol\$uit > sard.ant. bol\$bit

lat. PA\$RU\$IT > protorom. *par\$uit > sard.ant. par\$bit

以下に示す PŌNĒRE の完了形では *u が消失している。サルデーニャ語において s に後続する *u は規則的に消失する。動詞以外では lat. MĀNSUĒTUM > log.mod./camp.mod. mazedū 「温和な」のような例がある (Wagner 1984: 231)。

inf. PŌNĒRE 「置く」

1sg. POSUĪ > posi (CSP: 31ii, 38ii, 40ii, 42, 65, 185, 205, 218, 292, 324, 349. CV: 17)

2sg. POSUISTĪ > posisti (CSNT: 140)

3sg. POSUIT > posit (CSP: 40ii, 41, 49, 50, 51, 52, 54, 55, 58, 59 ecc. CSNT: 14ii, 18ii, 21, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37 ecc. CV: 8v, 13), positi¹⁸ (CV: 8ii)

1pl. POSUIMUS > posimus (CSP: 32ii, 43, 358. CSNT: 56ii, 163iv)

3pl. POSUERUNT > poserun (CSNT: 5, 90, 147, 176, 179, 211, 217, 224, 245, 262ii, 272 ecc.), posirunt¹⁹(CV: 13), posirun (CSNT: 299)

上に示した PŌNĒRE の完了形に含まれる *u の消失も、Syllable Contact Law による説明が可能である。すなわち、第 2 音節の頭子音 *u の共鳴度は第 1 音節の末子音 s の共鳴度より高い。このような Syllable Contact Law における不整合性は、*u の消失によって第 1 音節の末子音を第 2 音節の頭子音に移動させることで解決されたと考えられる。この過程は以下のように示される。

¹⁸ サルデーニャ語は開音節を好む言語であり、語末の i は子音で終わる語に付加される添加母音である。ただし必ずしも添加母音が表記されるとは限らない。また、3 人称単数には *pose* (CSNT: 233) という形式も確認された。語末の t の消失の要因は不明である。

¹⁹ 3 人称複数語尾に *-irunt* が観察される形式がいくつか存在する。第 IV 変化動詞の *-Ī(VE)RUNT* に由来する語尾からの類推によるものと考えられる。

lat. PO\$SU\$IT > protorom. *pos\$u̯it > sard.ant. po\$sit

一方、形態論的観点から見れば、*u̯ の消失の要因として完了語幹の一部である pos に含まれる s が、s 完了の影響によって完了形を特徴付けるマーカであるとして再解釈されたからであると考えられる。そのような意味では、u 完了から s 完了へ移行した動詞 (→ 3. 2. 1) として分類することができるかもしれない。

次に示す PLACĒRE の完了形に含まれる *u̯ も消失した。

inf. PLACĒRE 「好む」

3sg. PLACUIT > plachit (CSP: 383, 410iii) plakit (CSNT: 256)

1pl. PLACUIMUS → plachirus (CV: 9)²⁰

註 16 で述べたように、ラテン語では語頭の ku̯ は許容される音連続であったので、ロマンス祖語でも *ku̯ は音節初頭に位置することができた可能性がある。この場合 placuit は次のような変化を経たと考えられる。

lat. pla\$cu\$it > protorom. *pla\$ku̯it > sard.ant. pla\$kit

上に示したように、*pla\$ku̯it は Syllable Contact Law に従った音節構造を持っているといえる。従ってこの場合の *u̯ の消失は、Syllable Contact Law に動機付けられていない現象といえるかもしれない²¹。しかしながら対応するイタリア語 *piacque* では k の重子音化が見られる。重子音化によって音節境界の子音の共鳴度を等しくすることで Syllable Contact Law に従った音節構造を得たと考えるのであれば、ロマンス祖語における音節構造は *plak\$u̯it (> it. *piac\$que*) が仮定できる。このように考えるのであれば、古サルデーニャ語 *plakit* における *u̯ の消失も Syllable Contact Law に従った変化であるといえる。

このように、サルデーニャ語において u 完了は語幹末子音の種類によ

²⁰ 3 人称複数語尾 -erunt からの類推によって -irus になっている (cfr. Guarnerio 1906: 225).

²¹ サルデーニャ語ではラテン語の ku̯ に前舌母音が後続する場合、u̯ は消失する (Wagner 1984: 230-231) : lat. QUĪ > ki (CSP: 2ii, 4, 5 ecc. CSNT: 5, 6ii, 14 ecc. CV: 1, 2, 3 ecc.) 「(関係詞)」, lat. QUĀERIS > *ku̯eris > keres (CSP: 185, 284ii, 365, 390. CSNT: 331) 「欲する (直説法現在 2sg.)」。一方、後舌母音が後続する場合や、前に鼻音がある場合は ku̯ は b(b) になる (Wagner 1984: 224-225) : lat. EQUAM > ebba (CSNT: 276, 305) 「雌馬」, lat. QUĪNQUE > log.mod. kímbe 「5」。

って 3 通りの変化が観察される。すなわち、語幹末子音が *t* あるいは *n* の場合は同化によって重子音が生じ、*l* 及び *r*、すなわち流音の場合は **u* が *b* に変化し、*s* 及び *k* の場合は **u* が消失する。そしてそれぞれの変化は Syllable Contact Law の枠組みによって説明できることを示した。

3. 1. 3 母音交替完了及び重複完了

2. 1 で示したように、FACĒRE の現在語幹 (cfr. FACIŌ) と完了語幹 (cfr. FĒCĪ) は *a* ~ *ē* の母音交替によって区別されていた。サルデーニャ語においても *a* ~ *e* の交替が観察される。

inf. FACĒRE 「する」

1sg. FĒCĪ > feki (CSP: 8, 9, 21, 73, 219, 229, 386, 387, 388, 396. CSNT: 172, 173, 199, 247, 256, 257, 267, 276, 288, 293), feci (CSNT: 5, 57, 61, 74, 90, 101, 102, 117, 140, 147), fechi (CSNT: 320), fegi (CSNT: 218. CV: 3, 5, 9v, 10, 16ii, 17ii)

3sg. FĒCIT > fekit (CSP: 27ii, 28, 45ii, 65, 100, 111, 146, 185, 200, 253 ecc. CSNT: 270, 328, 331), fechit (CSP: 411, 438), fecit (CSNT: 15, 43, 140ii, 188, 232, 245), fegit (CV: 8, 11iv, 12, 13, 14iiv, 15, 16, 17)

1pl. FĒCIMUS > fekimus (CSP: 122, 220, 282, 340, 387, 408), fechimus (CSP: 14), fecimus (CSNT: 163), fegimus (CV: 1) (→ fegirus (CV: 16, 18))

3pl. FĒCERUNT > fekerun (CSP: 21, 23, 26, 27, 30iii, 32, 34, 36, 37iii, 38 ecc.), fecherun (CSP: 441), fekerunt (CSP: 314. CSNT: 245), fecerun (CSNT: 270), fegerunt (CV: 13ii, 14, 16ii, 17)

VIDĒRE の現在語幹 (cfr. VIDEŌ) と完了語幹 (cfr. VĪDĪ) は *i* ~ *ī* という母音交替によって特徴付けられていた。しかしながら、サルデーニャ語をはじめとするロマンス諸語では母音の長短の対立が失われたので、同時に現在語幹と完了語幹の対立も失われた。従って、古サルデーニャ語では現在形と完了形は語尾によってのみ区別されるようになったと考えられる。例えば古ログドーロ方言の直説法現在 3 人称単数語尾は *-et* であるので、直説法現在 **uidet* と完了形 *uidit* は語尾 *-et* と *-it* によって弁別されていた。

inf. VIDĒRE 「見る」

3sg. VĪDIT > uidit (CSP: 112, 146)

3pl. VĪDERUNT > uiderun (CSP: 356)

DARE の現在語幹は *da* であり、完了語幹は語根の重複を伴う *ded* である。

inf. DARE 「与える」

1sg. DEDĪ > *dei* (CSP: 5, 9, 19, 40, 42, 97, 114, 115, 117, 122 ecc. CSNT: 2, 3, 4, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12 ecc. CV: 3, 9vi, 10, 13ii, 14ii, 16iii, 17viii)

2sg. DEDISTĪ > *desti* (CSP: 106, 111ii)

3sg. DEDIT > *deit* (CSP: 40, 42, 56iii, 67, 70, 73, 83ii, 85ii, 95, 97 ecc. CSNT: 18, 26, 48, 52, 62, 63, 67, 79ii, 108, 113 ecc), *dedi* (CV: 4iii, 8v, 9ii, 11ii, 12, 13ix, 14xvi, 15ii, 16v, 17vii)

1pl. DEDIMUS > *deimus* (CSP: 30, 35ii, 180, 237, 298, 368)

3pl. DEDERUNT > *derun* (CSP: 9, 10, 22, 29, 34, 46, 47, 68, 75, 79 ecc. CSNT: 52, 102, 111, 117, 140ii, 146, 163ii, 182, 193, 209 ecc.), *derunt* (CSNT: 153. CV: 4, 8ii, 9, 10, 13iii, 14, 16ii), *derunti* (CV: 8, 16ii), *deruntu* (CV: 16)

上に示したように、2 人称単数を除く形式では、母音間に位置する第 2 音節の *d* の消失が観察される。一方 2 人称単数では音節 *di* が消失している。DARE の完了形は全て初頭に *d* を持つことを考慮に入れると、*d* 及び *di* の消失はハプロロジーによるものと考えられる (cfr. Meyer-Lübke *op.cit.* 49)。

Guarnerio (1907: 218) によると、CV すなわち古カンピダーノ方言で 3 人称単数 DEDIT は次のような変化を経たという：1) 異化にともなう第 2 音節 *di* の消失，2) 添加母音 *i* の付加，3) 添加母音によって母音間に位置するようになった語末の *t* の弱化 (i.e. DEDIT > **det* > **deti* > *dedi*)。このように DARE の完了形では *d* のみが消失する場合と、音節 *di* が消失する場合がある。

次に示す VĒNDĒRE は DARE と同様に重複完了を持つ。第 2 音節の *di* がハプロロジーによって消失したと考えられる²²。

²² 単数形に関していえば、2 つ目の *d* の消失によって実際の形式を導くことができるかもしれない。しかしながら、CSP 及び CSNT すなわち古ログドーロ方言では母音間有声閉鎖音の消失はまだ観察されない。従ってここではハプロロジーという変化を想定する。

また別の解釈として、現在語幹 *vend* が完了語幹 *vendid* にとって代わったと捉えることもできる。それと同時に VĒNDĒRE の現在形と完了形も語尾によってのみ区別されていたといえる (→3.2.6)。

inf. VĚNDĚRE 「売る」

1sg. VENDĪDĪ → uendi (CSP: 107ii), bendi (CSP: 183)

2sg. VENDIDISTĪ → vendisti (CSNT: 267)

3sg. VENDĪDIT → uendit (CSP: 227, 429), bendit (CSP: 146), vendit (CSNT: 306)

3pl. VENDIDERUNT → venderun (CSP: 10), uenderun (CSP: 87), benderun (CSP: 9, 147ii)

3. 2 完了形の形成法の移行が観察される動詞

本節では、ラテン語から古サルデーニャ語に至る過程において、完了形の形成法に移行が見られる動詞を扱う。完了形の形成法の移行パターンを分類した上で、それぞれの移行の要因及びその背景について考察を加える。

3. 2. 1 u 完了から s 完了へ移行した動詞

PĀRĚRE の完了形は本来 u 完了であった。サルデーニャ語においても 3. 1. 2 で示したように、u 完了に由来する paruit, paruerun が観察される。しかしながら以下に示すように語根の直後に s を含む形、すなわち s 完了に移行した形式も観察される。coberssi についても同様に、本来は u 完了であったが s 完了に移行している。

inf. PĀRĚRE 「～に見える」

3sg. PĀRUIT → parsit (CV: 17)

inf. COOPERĪRE 「覆う」

1sg. COOPERUĪ → coberssi²³(CV: 9)

3. 2. 2 母音交替完了及び重複完了から s 完了へ移行した動詞

LEGĚRE の現在語幹 (cfr. LEGŌ) と完了語幹 (cfr. LĒGĪ) は e ~ ē の母音交替によって区別されていた。しかしながらサルデーニャ語では他のロマンス諸語と同様、母音の長短の対立は消失したので、現在語幹と完了語幹を区別する手段も失われた。完了語幹であることをより明確に標示するために、母音交替完了から s 完了へと移行したと考えられる。

²³ s が二重に表記されているが、おそらく書き手の誤りであったと思われる。実際は /koberssi/ であったと推定できる。

inf. LEGĒRE 「読む」

1pl. LĒGIMUS → *leksimus > lesimus (CSNT: 80)

3pl. LĒGERUNT → *lekserunt > lesserun (CSNT: 270), llesserun²⁴(CSP: 245)

同様に, COLLIGĒRE の現在語幹 (cfr. COLLIGŌ) と完了語幹 (cfr. COLLĒGĪ) は母音交替 i ~ ē によって区別されていた²⁵. 語幹の対立はサルデーニャ語でも保存されているにもかかわらず, s 完了への移行が見られる.

inf. COLLIGĒRE 「集める」

1sg. COLLĒGĪ → *kolleksi > gollessi²⁶(CSP: 291)

OCCĪDĒRE の完了形は本来重複完了であったが, 接頭辞 ob にともなう母音の消失及び弱化によって現在語幹と完了語幹いずれも occīd になり, ラテン語の段階で両者の区別は失われていた(現在語幹 ob + caed > occīd, 完了語幹 ob + cecaid > occīd. cfr. 現在語幹 caed, 完了語幹 cecīd 「倒す」(cfr. Palmer 1988: 272)). サルデーニャ語では両語幹の区別を明示するために重複完了から s 完了に移行したと考えられる.

inf. OCCĪDĒRE 「殺す」

2sg. OCCĪDISTĪ → okisisti (CSNT: 305)

3sg. OCCĪDIT → ockisit (CSP: 49, 110ii), okisit (CSP: 110), occisit (CSNT: 117, 255)

3. 2. 3 弱変化タイプから s 完了に移行した動詞

QUAERĒRE の完了形は弱変化タイプに属していた. しかしサルデーニャ語では以下に示すように s 完了へと移行した. またこの際, 現在語幹の一部である quaer に由来する形式にとって代わられている.

²⁴ 古サルデーニャ語文献では, 語頭子音が二重に表記されることがある: (e) ppumu (CSP: 40. CSNT: 26) 「果樹園」, (a) tterra (CSNT: 179) 「土地」. このような現象が見られるのは, その直前の語が e (< lat. ET) 「そして」と a (< lat. AD) 「~に」の場合にほぼ限られており, イタリア語の一部の方言に見られる raddoppiamento sintattico との関連が窺える.

²⁵ COLLIGĒRE では, 接頭辞 con の付加によって leg に含まれる e が弱化して i になっている. すなわち本来の語根は上に示した leg と同一である.

²⁶ 母音で終わる語に後続する場合, 語頭の無声音が対応する有声音で表記されることがある: <s'ena dorta> (= torta) (CSP: 202) 「泉」(cfr. Wagner 1984: 120-121). 語頭閉鎖音の有声化に関する詳細については Kanazawa (印刷中) を参照.

inf. QUAERĒRE 「欲する」

3sg. QUAESĪVIT → kersit (CV: 9)

3pl. QUAESĪ(VE)RUNT → ckerserun (CSNT: 140)

QUAERĒRE は第 III 変化動詞に属していた。2.1 で、第 III 変化動詞は強変化タイプの完了形を持つという一般的傾向について述べた。このような第 III 変化動詞の性質に従って、QUAERĒRE の完了形は弱変化タイプから強変化タイプである s 完了へと移行したと考えられる。

3.2.1, 3.2.2 及び本節で見たように、サルデーニャ語では s 完了への移行が頻繁に観察される。Blasco Ferrer (1984: 105) によると、s 完了への移行は 11 世紀から 14 世紀にかけて主に島南部を統治したピサ王国がもたらしたイタリア語（トスカーナ方言）の影響によるものであるという。実際、イタリア語でも s 完了への移行が観察される：1sg. lat. QUAESĪVĪ, LĒGĪ, OCCĪDĪ, COOPERUĪ → it. chiesi, lessi, uccisi, copersi. しかしながら既に示したように、s 完了への移行はイタリア語の影響を受けていない古ログドローロ方言、すなわち CSP 及び CSNT にも観察される。もし s 完了への移行をイタリア語の影響に帰するのであれば、この現象は CV すなわち古カンピダーノ方言にしか観察されないはずである。以上のような論拠から、イタリア語の影響だけでは s 完了への移行の要因を説明することはできない。

以上の考察から、s 完了への移行はロマンス祖語の段階のある時点で生じた変化であると推察できるが、サルデーニャ語とイタリア語で独自に生じた可能性も否定できない。いずれにせよ、s 完了は完了形を顕著に特徴付ける機能を持っており、それと同時に完了形の形成法として無標な手段であったと推定できる²⁷。

3. 2. 4 母音交替完了及び重複完了から u 完了へ移行した動詞

VENĪRE の現在語幹 (cfr. VENIŌ) と完了語幹 (cfr. VĒNĪ) は e ~ ē の母音

²⁷ 註 1 で、ログドローロ方言の変種では完了形が保存されていると述べた。Wagner (1938-1939: 19-21), Dardel (*op.cit.* 164-167) によると、この方言では本来の完了形に加えて、s 完了以外の完了形に語尾 1sg. -ési / -ísi, 3sg. -ésit ecc. を付加した形式が用いられているという：1sg. féyi (< lat. FĒCĪ) ~ feyísi, 1sg. kérfi (< *kerŷi) ~ kerfési. さらに、直説法現在形に同様の語尾を付加した完了形も観察されるという：1sg. prési (< lat. PRESĪ) ~ prendési (= 直説法現在 préndo + ési) 「取る」, 1sg. ténni (< lat. TENUĪ) ~ tenzési (= ténzo + -ési) 「持つ」, 1sg. pósi (< lat. POSUĪ) ~ pondzisi (= pónzo + -ísi) 「置く」。これらの語尾に含まれる s は s 完了に由来するものと推定されている。このような事実も、s 完了が完了形を標示するための無標な手段であったことの根拠になるといえる。

交替によって区別されていた。以下に示すように，古サルデーニャ語の形式に含まれる重子音 *nn* は対応するラテン語の形式から音変化によって導くことはできない。そこで *VENIRE* の完了形は母音交替完了から *u* 完了へ移行したと仮定すると，重子音 *nn* は **nu* における順行同化によって導くことができる（→ 3.1.2）。

inf. *VENIRE* 「来る」

1sg. *VĒNĪ* → **venūi* > *uenni* (CSP: 139)

3sg. *VĒNIT* → **venūit* > *bennit* (CSP: 42, 66, 95, 146, 181ii, 205, 314, 358, 375, 383. CSNT: 51, 52, 323. CV: 9, 13, 16, 17ii), *uennit* (CSP: 45, 146, 356, 365), *vennit* (CSP: 152, 358, 437. CSNT: 208, 276), *venit* (CSNT: 162, 267)

1pl. *VĒNIMUS* → **venūimus* > *uennimus* (CSP: 32, 101), *vennimus* (CSP: 181, 339, 340)

3pl. *VĒNERUNT* → **venūerunt* > *bennerun* (CSP: 9, 44, 64, 147, 205iii, 394. CSNT: 140), *uennerun* (CSP: 241), *vennerun* (CSP: 221, 342ii), *venneru* (CSP: 147), *benerunt* (CSNT: 140)

VENIRE の完了形が *u* 完了に移行した要因として，サルデーニャ語をはじめとするロマンス諸語では母音の長短の区別が失われ，現在語幹と完了語幹を区別する手段が失われたことが挙げられる。すなわち，完了語幹であることをより明確に示すために *u* 完了へと移行したと考えられる。

次に見る *STARE* の完了語幹は重複を伴う *stet* (< **stest*) であったが，サルデーニャ語では *u* 完了に移行したと考えられる。*istettit* に含まれる重子音 *tt* は **tu* における順行同化によって生じたと考えられるからである（→ 3.1.2）。

inf. *STARE* 「居る」

3sg. *STETIT* → **stetūit* > *istettit* (CSP: 343, 356)

以下に示す完了形 *creterun* は対応するラテン語 *CRĒDIDERUNT* から音変化によって導くことはできない。そこで，重複完了であった *CRĒDIDERUNT* はサルデーニャ語において *u* 完了，すなわち **credūerunt* に移行したと仮定する。以下では，*creterun* が **credūerunt* から音変化によって導かれることを論じた上で，*u* 完了への移行を想定することの妥当性を示す。

inf. CRĒDĒRE 「信じる」

3pl. CRĒDIDERUNT → *cred̥erunt > creterun (CSNT: 117)

3pl. SCRĒDIDERUNT → *scred̥erunt > screterun (CSNT: 140)

*cred̥erunt に含まれる *d̥ は 3.1.2 で示したように、順行同化によって *dd になることが予測される。また註 12 で示したように有声閉鎖重子音は無声閉鎖重子音になるので、*dd は tt に変化する。一方、既に述べたように古サルデーニャ語文献では重子音はしばしば単子音で表記される。このような表記法の特徴に従えば、creterun は実際は重子音 tt を含む /kretterun/ であったと推定できる。現代サルデーニャ語の過去分詞 kréttiðu に含まれる重子音 tt はこの推定を裏付ける事実の 1 つである²⁸。以上のように、creterun は *cred̥erunt から音変化によって導くことができ、同時に重複完了であった CRĒDIDERUNT が u 完了に移行したことの根拠となる。接頭辞 s が付加された screterun 「信用しない」についても全く同様の方法で説明することができる。

3.2.2 と本節で示したように、母音交替完了と重複完了は s 完了及び u 完了にとって代わられる傾向にある。この事実は、音韻的な要因によって現在語幹と完了語幹が融合したことも相俟って、母音交替完了と重複完了が完了語幹を標示する手段としての機能を失いつつあったことを示唆しているといえる。

3.2.5 弱変化タイプから u 完了に移行した動詞

ラテン語において PETĒRE の完了形は弱変化タイプに属していた。一方、サルデーニャ語の形式では重子音 tt が観察される。この tt も PETĒRE の完了形が弱変化タイプから u 完了に移行したと想定することで説明を与えることができる。つまり、*t̥u における順行同化によって重子音 tt が生じたと考えることで、以下に示す完了形を導くことができる。

inf. PETĒRE 「願う」

1sg. PETĪVĪ → *pet̥ui > petti (CSP: 22, 29ii, 32, 42, 47ii, 186, 241, 289, 348, 392)

3sg. PETĪVIT → *pet̥uit > pettit (CSP: 40, 70, 184, 298)

²⁸ log.mod. krèere (< lat. CRĒDĒRE) の過去分詞は *kréiðu (< lat. CRĒDITUM) が予測されるはずであるが、実際は重子音 tt が含まれている。本稿では十分に触れる余裕はないが、過去分詞は完了形からの類推の影響が顕著である。

3pl. PETĪ(VE)RUNT → *petu_ɣerunt > petterun (CSP: 28, 30)

一方、弱変化タイプを継承している形式も観察された：1sg. PETĪVĪ > pidii (CV: 12, 17), 3sg. PETĪVIT > petivit (CSNT: 293, 300).

PETĒRE は第 III 変化動詞に属していた。2.1 で述べたように、第 III 変化動詞は強変化タイプの完了形を持つということで特徴付けられる。このような第 III 変化動詞の性質に従い、PETĒRE の完了形は弱変化タイプから強変化タイプの u 完了へ移行したと考えられる。

3.2.3 で、弱変化タイプであった QUAERĒRE の完了形が s 完了に移行したことを示した。これに対して、u 完了に移行した例も観察される (cfr. Wagner 1938-1939: 16)。この場合も、現在語幹の一部である quaer に由来する形式が用いられている。

inf. QUAERĒRE 「欲する」

1sg. QUAESĪVĪ → *keru_ɣi > kerui (CSP: 183), kerbi (CSNT: 151), kerri (CV: 13)²⁹

3sg. QUAESĪVIT → *keru_ɣit > keruit (CSP: 83, 253, 291), cerbit (CSNT: 127, 129, 201), cervit (CSNT: 164, 232), kerbit (CSNT: 200), kervit (CSNT: 293), kerfidi (CV: 15)

3pl. QUAESĪ(VE)RUNT → *keru_ɣerunt > keruerun (CSP: 42, 68, 99, 114, 194, 220, 241, 254, 319, 338, 365, 373), kerberun (CSP: 100), kerfirunt (CV: 12, 17), kerferunt (CV: 17)

上に示した形式では <u> と の交替が見られるが、3.1.2 で触れたように、いずれの表記も /b/ を表していたと推定できる。一方、3 人称において f が現れている例が存在する。Wagner (1984: 292) によると、rb > rf は他の語にも観察されるというが、規則的な変化ではないようである：lat. CERVUM > log.mod. kérfu ~ kérβu, camp.mod. tšérβu 「鹿」、lat. ACERBUM > log.mod. kérfu ~ kérvu 「未熟な」、lat. EX + CREPĀRE > *iskerbare > log.mod. iskerfáre ~ iskerváre 「押しつぶす」。

3. 2. 6 現在語幹からの類推で完了語幹が失われた動詞

以下に示すように、VINCĒRE の現在語幹 (cfr. VINCŌ) と完了語幹 (cfr.

²⁹ この例では、*ru_ɣ における順行同化によって重子音 rr が観察される (cfr. Guarnerio 1906: 226)。

vĪCĪ) は母音交替 $i \sim \bar{i}$ と鼻音接中辞 n の有無によって区別されていた。しかしながらサルデーニャ語では完了形においても現在語幹からの類推によって *vinc* に由来する形式が観察される。なおここで見られる n は現在語幹に特有の接中辞である。

inf. VINCĒRE 「勝つ」

1sg. VĪCĪ → *binki* (CSP: 3ii, 33, 42, 44ii, 45, 46, 48, 57, 64, 74 ecc. CSNT: 152, 162, 194ii, 267, 305, 328, 331, 332), *binchi* (CSP: 390. CSNT: 323, 326), *vinchy* (CSP: 438), *uinki* (CSP: 33, 42, 73, 80, 81, 82, 89ii, 100, 101, 107, 226, 243, 269), *vinki* (CSNT: 211, 235, 236ii, 269, 271ii, 305, 306, 323, 328, 332), *vinci* (CSNT: 267)

3sg. VĪCIT → *binkit* (CSP: 8, 109, 147, 241, 253, 284ii, 303, 306, 324, 327, 415), *uinkit* (CSP: 108, 253), *vinkit* (CSNT: 195ii, 211, 287, 300ii)

1pl. VĪCIMUS → *binkimus* (CSP: 372, 373ii)

3pl. VĪCERUNT → *binkerun* (CSP: 305ii), *uinkerun* (CSP: 243)

以下に示す動詞も同じく、ラテン語では重複完了であり、完了語幹は現在語幹と異なっていた。これに対してサルデーニャ語では現在語幹からの類推によって *disk* が用いられている。なお *sc* はラテン語において起動相を示す、現在語幹に特有の接尾辞である。

inf. DISCĒRE 「学ぶ」

3sg. DIDICIT → *diskit* (CSP: 30)

上に示した 2 つの動詞では、現在語幹と完了語幹が同一になったので、3.1.3 で示した VIDĒRE と同様、両者は語尾によってのみ弁別されていたといえる。このように、現在語幹に基づいた完了形はサルデーニャ語において新たに生じた形成法であるといえる。

3. 2. 7 弱変化タイプへ移行した動詞

3.1.1 で ADDŪCĒRE の完了形は s 完了を継承していることを示した。これに対して、語尾 $-iit$ を持つ形式も存在する。一方、弱変化タイプである第 IV 変化動詞に由来する完了形の語尾にも同様に $-iit$ が観察される：lat. *MORĪVIT > *moriit* (CV: 12) 「死ぬ」。すなわち、以下に示す形式は

第 IV 変化動詞に由来する語尾からの類推によって弱変化タイプの語尾を持つに至ったと考えられる³⁰：

inf. ADDŪCĚRE 「持って行く」

3sg. ADDŪXIT → *battivit > batiit (CV: 18)

ADDŪCĚRE の完了形が弱変化語尾の付加によって形成されると仮定すると *battuiit (< **battukivit) が得られる。しかし実際は **batt** が語幹であると再解釈されたと考えられる。この推定は、**batt** に不定詞語尾が付加された *log.mod. battíre, camp.mod. battíri* からも支持される。

3. 1. 3 で FACĚRE の完了形は母音交替完了を継承していることを示した。これに対して弱変化タイプに移行した例もある。3. 2. 5 で示した PETĪVĪ > pidii (CV: 12, 17) と比較すると、*fegii* に見られる語尾 *-ii* も第 IV 変化動詞の語尾 *-ivī* に由来すると考えられる。従って *fegii* は弱変化タイプに移行した **fekivi* から導くことができる。また *fagirint* に見られる語尾も弱変化の語尾 *-i(VE)RUNT* に由来すると推定される。

inf. FACĚRE 「作る」

1sg. FĚCĪ → *fekivi > fegii (CV: 15)

3pl. FĚCERUNT → *fakirunt > fagirint (CV: 12)

fegii では完了語幹が用いられているが、*fagirint* では現在語幹に弱変化語尾が付加されており、弱変化タイプへの完全な移行が窺える。完了形の形成法において弱変化タイプは強変化タイプに比べて圧倒的に多い。強変化タイプから弱変化タイプへの移行はこのような数的要因によるものと考えられる。

3. 2. 8 その他

CLAUDĚRE 「終結する」の完了形は *s* 完了であり、ラテン語では語尾の付加によって語根末の *d* が消失するという形態音韻論的交替があった (i.e. *CLAUD + -SĚRUNT > CLAUSĚRUNT*)。サルデーニャ語では本来の語幹 *claud* からの類推によって完了形を示すマーカーである *s* が失われている

³⁰ 第 III 変化動詞の完了形でも弱変化タイプの語尾を持つものがある：PETĪVĪ (inf. PETĚRE) 「願う」。しかしこのタイプの動詞はごく僅かであり、類推のモデルとなる可能性は低い。従って本稿では第 IV 変化動詞からの類推が生じたと推定する。

る。また、メタテシス $clu > cul$ が観察される：CLAUSĒRUNT → culderun (CSNT: 330)。

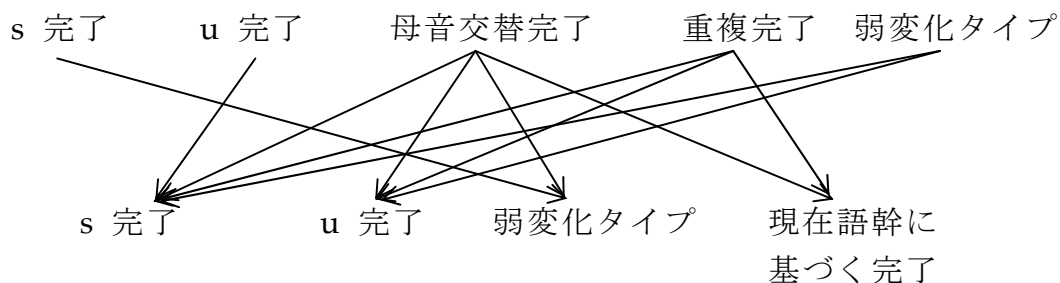
RESPONDIT (inf. RESPONDĒRE 「答える」) は古サルデーニャ語 risposit (CSP:284) に対応する。この形式では posit との混交が見られる。RESPONDIT は本来重複完了であったが、接頭辞 re にともなうハプロロジーによって現在語幹との区別が失われていた。このような事実が混交の 1 つの要因であると推定できる：現在語幹 respond ~ 完了語幹 *re + spopond > respond (cfr. 現在語幹 spond ~ 完了語幹 spopond 「約束する」)。

AFFERRE 「持って行く」の完了形は ATTULĪ である。TULĪ は TOLLĒRE 「取り除く」の完了形からの補充法によるものである (Ernout *op.cit.* 194)。しかしサルデーニャ語をはじめとするロマンス諸語では TULĪ は失われた。従って AFFERRE の完了形には語幹 AFFER に s 完了の語尾を付加した形式が観察される：3sg. ATTULĪ → affersit (CSP: 191, 356ii, 430), 3pl. ATTULĒRUNT → afferserun (CSP: 356)。

4 まとめ

本稿では、ラテン語の強変化タイプの完了形が古サルデーニャ語においてどのように現れているかを論じた。とりわけ u 完了については 3 通りの変化が観察されることを示し、それぞれの変化に対して Syllable Contact Law の観点から説明を与えた³¹。

さらに、完了形の形成法に移行が見られる動詞については、その移行パターンを分類し、それぞれの移行の要因について考察を行った。完了形の形成法の変行パターンを図式化すると、以下ようになる。



³¹ なぜ語幹末子音の種類によって異なる変化が観察されるのかという問題については、今後の課題としたい。

考察の結果、母音交替完了と重複完了は失われ、s 完了及び u 完了にとって代わられる傾向にあることが明らかとなった³²。この事実は、s 完了と u 完了は完了形を顕著に特徴付ける機能を持っていた一方、母音交替完了と重複完了は、音韻的な要因も重なって、完了形を標示する機能を失いつつあったことを示唆するものといえる。この推定は完了語幹が現在語幹にとって代わられた例からも支持される。

また、弱変化タイプから強変化タイプに移行した動詞の例に関しては、ラテン語の第 II 変化動詞と第 III 変化動詞に由来する動詞は強変化タイプの完了形を持つという一般的性質に従って、二次的に強変化タイプの完了形を得たと推定した。一方強変化タイプから弱変化タイプへの移行については、弱変化タイプの数的優位性によるものと主張した。

参考文献

- Atzori, M. T. 1953. *Glossario di sardo antico*. Parma: Scuola tipografica benedettina.
- Blasco Ferrer, E. 1984. *Storia linguistica della Sardegna*. Tübingen: Max Niemeyer.
- . 2003. *Crestomazia sarda dei primi secoli. volume primo. Testi - grammatica storica - glossario*. Nuoro: Ilisso Edizioni.
- Dardel, R. de. 1958. *Le parfait fort en roman commun*. Ginevra: Société de publications romanes et françaises.
- Delogu, I. 1997. *Il condaghe di San Pietro di Silki. Testo logudorese inedito dei secoli XI-XIII*. Sassari: Dessì.
- Ernout, A. 1953³. *Morphologie historique du latin*. Parigi: Klincksieck.
- Guarnerio, P. E. 1906. "L'antico campidanese dei sec. XI-XIII secondo <Le antiche carte volgari dell'archivio arcivescovile di Cagliari.>" *Studj romanzi* IV. 189-259.
- . 1907. "Reliquie sarde del Condizionale perifrastico col Perfetto di *habere*." *Romanische Forschungen* XXIII. 217-222.
- Kanazawa Y. 印刷中. "La sonorizzazione delle occlusive sorde iniziali nello spagnolo e nel sardo." *Annali della Facoltà di Lettere e Filosofia dell'Università di Cagliari*.

³² s 完了と u 完了のどちらに移行するのかという問題については、稿を改めて論じたい。

- Maiden, M. 1995. *A Linguistic History of Italian*. New York: Longman.
- Merci, P. 2001. *Il Condaghe di San Nicola di Trullas*. Nuoro: Ilisso Edizioni.
- Meyer-Lübke, W. 1902. "Zur Kenntniss des Altlogudoresischen." *Sitzungsberichte der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften*. Band CXLV. 1-76. Vienna: C. Gerold's Sohn.
- . 1923. *Grammaire des langues romanes. Tome deuxième: morphologie*. New York: G. E. Stechert & Co.
- Murrey, R. W. / Vennemann, T. 1983. "Sound change and syllable structure in Germanic phonology." *Language* XIX. 514-528.
- Palmer, L. R. 1988. *The Latin Language*. Norman: University of Oklahoma Press. (reprint)
- Solmi, A. 1905. "Le carte volgari dell'archivio arcivescovile di Cagliari. Testi Campidanesei dei secoli XI=XIII." *Archivio storico italiano* V: 35. 277-330.
- Wagner, M. L. 1938-1939. "Flessione nominale e verbale del sardo antico e moderno." *Italia dialettale* XIV. 93-170, XV. 1-30.
- . 1960-1964. *Dizionario etimologico sardo (DES)*. Heidelberg: Carl Winter.
- . 1984. *Fonetica storica del sardo. Introduzione, tradizione, e appendice di Giulio Paulis*. Cagliari: Gianni Trois. (tradotto da *Historische Lautlehre des Sardischen*. Halle: Max Niemeyer 1941.)

Perfetti forti nel sardo antico

Yusuke KANAZAWA

Sommario

Nel sardo antico abbiamo le forme del perfetto provenienti direttamente dal latino, che sono scomparse nel sardo moderno (tranne in qualche varietà dialettale). Nel presente articolo si considera il cambiamento diacronico dei perfetti forti (*s*-perfetto, *u*-perfetto, perfetto con apofonia e perfetto con reduplicazione), utilizzando i seguenti testi antichi: il *Condaghe di San Pietro di Silki*, il *Condaghe di San Nicola di Trullas* e le *Carte Volgari*. Per quanto riguarda *u*-perfetto, si può osservare tre tipi del cambiamento. Si mostra che questi cambiamenti sono spiegati dal punto di vista di "Syllable Contact Law".

Accanto ai verbi che ereditano la formazione del perfetto originario, abbiamo anche quelli che l'hanno sostituito con l'altra. Nel presente articolo si classificano i tipi della sostituzione, e si mostra che perfetto con apofonia e quello con reduplicazione avevano la tendenza di essere sostituiti da *s*-perfetto e *u*-perfetto. Questo fatto significa che i primi due stavano perdendo la funzione di caratterizzare il perfetto, mentre i secondi due potevano caratterizzarlo chiaramente. Inoltre si può considerare che il trasferimento dal perfetto debole al forte è dovuto al principio che la seconda e la terza coniugazioni latine generalmente avevano il perfetto forte, e quello dal perfetto forte al debole è alla maggioranza del numero del perfetto debole.

(受領日 2008年6月30日)
(受理日 2008年10月2日)